

[原著論文]

現在時の肯定平叙文におけるムードの「のだ」の表現効果に関する考察

羅 雪梅*

The performance effects research of “mood noda” in the declarative sentences of the present tense

Setsubai RA*

Abstract

This thesis sets the scope of the study clearly and studies the “mood noda” in the declarative sentences of the present tense. Through the research of five examples in the literature work, the author put forward the most reasonable and understandable classification criteria, at the same time, the author summed up and analyzed fourteen performance effects of “mood noda” in the declarative sentences of the present tense.

KEY WORDS : the scope of the study, “mood noda”, the performance effects

1. はじめに

日本語において、話し言葉にせよ、書き言葉にせよ、特に会話の中で「のだ」の使用は驚くほど多い。先行各説はみな一つの解釈の仕方ですべての「のだ」の用法や実質を包括的に説明しようとする姿勢を示している。しかし、『のだ』の問題の難しさは、『のだ』が呈する多様な現れを、いかに包括的かつ簡潔に首尾一貫した方法で分析・記述するかにある。¹⁾ 本稿ははっきりと「のだ」の研究範囲を限定し、構文論の立場に立って、その範囲内の「のだ」の表現効果を取り上げようと思っている。

2. 研究範囲の設定

1) 性質上の設定

ムードの「のだ」のみ扱い、スコープの「のだ」を

扱わない。筆者が収集した実例によると、ムードの「のだ」はスコープの「のだ」より、数量的に圧倒的に多いだけでなく、その使用状況も極めて複雑だからである。では、ムードの「のだ」とスコープの「のだ」とはそれぞれ何かをまず概観しよう。

(1) 行きたくて行くのではなく、行くしかないから行くのだ。(『魂』 p.225)

(1')* 行きたくて行かない。(作例)

野田春美¹⁾によると、「否定などの作用が及ぶ範囲をスコープ、その作用を集中的に受ける部分をフォーカスと呼ぶ」という。

(1')では、否定の作用の及ぶ範囲はその直前の動詞「行く」にしか至っていない。否定の作用を集中的に受けるフォーカスも「行く」である。ここで不適格な文になる。一方、(1)では、「のではなく」を用いることによって、否定のスコープは「行きたくて行くの」にまで及ぶ。話し手が「行く」ことは事実であり、

*九州共立大学共通教育センター

*Kyushu Kyoritsu University

否定されていない。ただ、「行く」原因は「行きたくて」ではなく、「行くしかないから」である。つまり、「のだ」の使用によって、「行きたくて」と「行くしかない」がそれぞれ原因として、否定と断定のフォーカスになるのである。このような、前接する部分を体言化する機能をもっており、事態の成立以外の部分を否定などのフォーカスにするのに必須である「の」＋「だ」の「のだ」をスコープの「のだ」という。

ムードの「のだ」の例を見よう。

(2) 風邪をひきました。雨に濡れたのです。

(久野暉 (1979: 144))

久野暉¹⁾はこのように「のです」の意味を分析している：私が風邪をひいたことの説明は、雨に濡れたことです。つまり、「のだ」は話し手の説明を与える役割を果たしているのである。あきらかに、ここでの「のだ」はスコープの「のだ」とは根本的に異なる。むしろ、一種の心的態度を表すことになっているのである。(2)のように、話し手の発話時の心的態度を表し、具体的な文法表現手段の一種である「のだ」は、ムードの「のだ」と位置づけられるべきである。

2) 形式上の設定

スコープの「のだ」を排除した後のムードの「のだ」のうち、形から見ると、主に、「のだ」を考察する。これは、現在時の肯定平叙文におけるムードの「のだ」を指す。ムードの「のだ」は現在時の肯定平叙文に頻繁に現われるため、ムードの「のだ」に共通する代表性や一般性も帯びるように思われる。それ故、この種類のムードの「のだ」に重点を入れて、考察することにしたのである。「のだが」「のだから」「のなら」「のだらう」「のか」「のだった」などを取り上げない。「のだ」だけでも、実際の日本語文の中で、「のだ」「のである」「のです」「の」「んだ」「んです」など、多様な表現形式があり、それは、文体差・男女差・地域差・年齢差などによるものもあるし、ほかの使い分けもある。用法は全く同じだというわけではない。だが、本稿では、それらの区別を無視して、「のだ」と一括して、検討することにした。

3. 現在時の肯定平叙文におけるムードの「のだ」の代表的な表現効果

以下、参考資料に出た用例を引用しながら、ムードの「のだ」の表現効果を考察していこうと思う。また、ムードの「のだ」は会話や対談の中で特に多用される

ので、用例を主に小説の中から抽出するのが好都合であると思う。一人の作家、一編の作品、あるいはごく限られた時間帯に書かれた作品だけにこだわると、ムードの「のだ」の全貌を客観的、科学的に反映できないかという恐れがあるので、作品を選ぶ際に、主に作家の知名度、性別と作風、作品の創作時間の多様さを考慮した。本稿は現代日本語におけるムードの「のだ」を考察対象とするので、できるだけ現在に近い時代に書かれた作品を選んだ。すると、渡辺淳一の『流水への旅(上、下)』(20世紀80年代、大衆文学)、赤川次郎の『殺人はそよ風のように』(20世紀80年代、大衆文学)、渡辺浩武の『デジタルな神様』(20世紀90年代、大衆文学)、柳美里の『魂』(今世紀、純文学、私記)、計五冊の作品に出てきた実例を用例として選んだ。

従来、「のだ」についての研究はそのさまざまな意味、用法に視点をおいてきた。しかし、それは果たして「のだ」自体が発揮している意味、用法なのだろうか。「のだ」自体がどれだけの意味を持っているかを追求するより、「のだ」にどれだけの表現意図を負わせることができるかを解明したほうが合理的ではあるまいかと思われる。筆者はムードの「のだ」はどれだけの表現効果を表せるかを検討したいと思う。多種多様な表現効果を挙げ尽くしそうもないかもしれないが、できるだけ、試みていきたいと思う。

1) 理由

I 追加理由：(「P. Qのだ.」)

文が前後二つある場合、ムードの「のだ」文は後ろに位置する場合、よく、前文が表す内容についての理由を与えたり、状況や先行文脈について、解釈をしたりする。本稿では、これを「追加理由」と呼ぶ。表記上の簡潔のため、本稿では「P」で状況や先行文脈を指し、「Q」でムードの「のだ」の前接する部分を指す。

(3) 朱子は、さっきから気になっていた。小さなライトが、ずっと後ろをついてくるのである。

(『殺人はそよ風のように』 p.18)

(4) 克彦は、ハッと頭を上げた。——首が痛い。

それも当然で、机に突っ伏したまま寝ていたのだ。

(同 p.27)

(3) の場合、「朱子は、さっきから気になっていた」(P) 理由は「小さなライトが、ずっと後ろをついてくる」(Q) である。

文が前後二つある場合、Pが後ろに移り、ムードの

「のだ」が前の文にあると、「発言の根拠」と「先触れ」の表現効果を表すことがある。この場合、「Qのだ。P.」になる。

Ⅱ 発言の根拠：（「Qのだ。P.」）

(5) 時間がないんだ。(ダカラ) 急いでくれ。

(田野村忠温^{III} (1992: 48))

(6) 予算は十分にあるのです。自由に使ってください。

(田野村忠温 (1992: 49))

(5)の場合、話し手はなぜ「急いでくれ」(P)と要求しているかという点、「時間がない」(Q)という現状にあるからである。(6)も同様で、なぜ「自由に使ってもいい」(P)かという点、その根拠は「予算は十分にある」(Q)からである。

Ⅲ 先触れ：（「Qのだ。P.」）

(7) 先生、お話があるんです。お部屋に伺ってもよろしいでしょうか。(庵功雄^{III} (2002: 288))

(8) A: 実は私田中さんと結婚するんです。

B: それはおめでとう。

A: それで、先生に仲人をしていただきたいんですが。(同)

(7)では、学生は、先生の部屋を訪ねようとしているが、先に理由（「お話がある」）(Q)を持ち出す。そして、「のだ」の「先に触れる」という表現効果によって、先生も注意して後ろの話を聞くことになる。つまり、「のだ」は先生の関心を高めたのである。

(8)でも、学生は先生に仲人をしてもらいたがるが、その理由（結婚しようとする）を先に挙げている。

一見して、「Ⅱ 発言の根拠」と「Ⅲ 先触れ」は似通っているが、さて、この二つの表現効果はどこが違うのだろうか。また、本稿で、このように分類した根拠はどこにあるのだろうか。

「発言の根拠」の場合：前文の内容は相手知っているはずだが、その時に十分に認識していない。「のだ」の使用によって、改めて認識させる。（ただし、(5)(6)について、場合によっては、相手は前文の内容を知らないこともある。後ろに命令((5)),許可((6))要求・依頼、推量・判断など、いずれも結論的な意味合いを含めた文がくる。「～のだから、当然～」[～である以上、当然～]などの意味を表している。

「先触れ」の場合：前文の内容は相手が知らない。後ろにはよく、依頼などの表現が来る。「～んですが、～」という意味である。先に提示することによって、いきなり用件を話し出すときに相手への配慮が伺われる。というのは、依頼など相手になんらかの厄介をかける申し出をするときに、相手の心理負担を軽減した

り、いきなり用件を持ち出す唐突性を避けたりできるからである。すると、あらかじめ前文を提示することによって、後ろの依頼などが無理なく有効に実現するようになるわけである。

2) 推量

(9) あっ、財布がない。電車の中ですられたんだ。

(田野村忠温 (1992: 22))

(10) きっと眠っちゃったんだわ、と思った。

(『殺人はそよ風のように』p.47)

(11) ——全部の引出しが一杯に飛び出し、中を引っかき回されている机の姿だった。

克彦も加わって、三人でしばしばポカんとそれを眺めていたが……。

「誰かが先に来たんだわ」

と、夏美が呟くように言った。(同 p.204)

推量を表すため、よく「きっと」「おそらく」「たぶん」と一緒に使われる。

3) 換言

I 原因が含まれる場合：（「PのはQのだ。」）

「PのはQのだ。」という文型で現れている。

(12) 外で音がするのは雨が降っているのだ。

(山口佳也^{IV} (1975: 227))

(13) 皮膚が荒れているのはビタミンが不足しているのだ。

(吉田茂晃^V (1988: 47))

吉田茂晃^Vは(13)をもって、「換言」と名付ける。

(13)では、“皮膚が荒れているコト”と“ビタミンが不足しているコト”とが同一の事態にほかならないこと。また、言い換えるといっても、QはPに対して、Pの原因を与える立場でもある。したがって、本稿では、さらに細分化して、以上の二例を「言い換えて、原因を示す」種類に配列した。

原因が含まれるので、3.1「理由」のI追加理由にはつながっている。ここではただ、「PのはQのだ。」という文型に含まれているのである。「P. Qのだ。」に変えても、完全に可能である。例えば、

(12') 外で音がする。雨が降っているのだ。

(作例)

(13') 皮膚が荒れている。ビタミンが不足しているのだ。

(作例)

II 推論が含まれる場合：（「P. Qのだ。」）

(14) しかし、それは僕だけではない。街を歩いているほとんどの人々が、頭にヘッド・ギアを装着している。皆、この“アドバイザー”のささやき

どおりに行動しているのだ。

(『デジタルな神様』 p.78)

(15) 彼はそこから外に出ていった。ところが、彼はそれから二度と帰ってこなかった。彼は脱走したのだ。(同 p.91)

いずれも、Pから推論を経て、Qと言い換えているのである。言い換える以上、「つまり」を付け加えて理解しても、自然な文になるはずである。

(14') 街を歩いているほとんどの人々が、頭にヘッド・ギアを装着している。つまり、皆、この“アドバイザー”のささやきどおりに行動しているのだ。(作例)

(15') 彼はそこから外に出ていった。ところが、彼はそれから二度と帰ってこなかった。つまり、彼は脱走したのだ。(作例)

実は、山口佳也^{IV}が既に指摘している：(「のだ」を用いる場合、)「結局、要するに、つまり、一言で言えば、換言すれば、言いかえれば、簡単にいえば、手取り早くいえば」などの語句が冠せられることがしばしばある。小説で調べると、次のように、実例で証明できる。

(16) 男には、職もなく、家もなく、歩いてはいても、どこへ行くというあてもなかった。

要するに、薄汚れた一人の浮浪者だったのである。(『殺人はそよ風のように』 p.7)

(17) ガンの細胞は通常の細胞と違い、養分と酸素さえ与え続ければ無限に分裂を続ける。

つまり、不死細胞なのである。

(『デジタルな神様』 p.24)

「要するに、つまり……+Qのだ」という形によって、前のPを簡潔な、分かりやすい言い方でまとめたのである。そのため、書き言葉では、よく意味段落の締めくくりとなる部分に用いられる。

4) 確認

(18) へえー、じゃあキミはひとりっこなんだ。

(吉田茂晃 (1988 : 51))

(19) あー、そうなんだ。(相槌) (同)

(20) 「学会や、研究の打ち合わせには出て行きますが、それ以外、研究所を離れることは滅多ありません」

「よほど、この街がお好きなのですね」

「街というより、氷が好きなんだと思います。」

…」(『流水への旅 (上)』 p.72)

(21) 「昨夜はお食事をとらなかったのですね」

九時に女中が朝食を運んできていった。

「研究所でいろいろなものをいただいて、お腹がいっぱいだったのです」

(『流水への旅 (下)』 p.8)

吉田茂晃^Vは例文 (18) (19) をもって、「確認」と認定した。吉田によると、「聞手に関するところがらについて聞手本人の目の前で自ら納得してみせて、そのことを以って聞手への確認ともする表現である」という。しかし、「聞手に関するところがらについて」、納得したり確認したりする以上、どうしても二人の間の会話が理解に必要であるように思われる。吉田のように、聞き手の話を抜きにして、話し手の話だけを挙げるのは、どうしても同感できない。そのため、筆者は実例を収集する際、特に意識して、会話同士のよりまとまった会話文をあげたのである。例えば、(21) では、旅館の女中は「お客さんが昨日の旅館の晩ご飯をとらなかった」のを知っていながらも、お客さんに確認する。この場合、「確認」というより、むしろ、ごあいさつや思いやりの役割も果たしているのである。

確認と換言Ⅱは似ているが、この二つの表現効果はどう違うのだろうか。

もちろん、つながっていることもあるが、確認のほうは、聞き手に質問したりして、答えてもらうニュアンスが感じられる。換言Ⅱのほうは、そのようなニュアンスはない。

5) 説明 (「PはQのだ。」)

主に、「PはQのだ。」文型で用いられる。

(22) アノ音ハ何ダ?

——アレハ鳩ノ鳴キ声デス

——アレハ鳩ガ鳴イテイル声デス

——アレハ鳩ガ鳴イテイルノデス

(野田春美 (1997 : 76))

(23) (刑事が容疑者のシャツに血痕がついているのを見つけて)

コレ (コノ血) ハ何ダ?

——コレハ自分ノ鼻血デスヨ

——鼻血ガツイタンデスヨ (同)

野田春美¹によると、「名詞文 [xはyだ] は、聞き手が指示対象を同定できるxについて、それが何であるかを聞き手にとって、意味のある分かりやすい形yで示すものだ」という。具体的には、例えば、(22) では、音の正体を、(23) では、血痕が事件との関係があるかどうかを言っているのである。したがって、「ある事物が何ものであるか (その事物の正体、その

事物が存在する事情、その事情が何を意味するか)を、聞き手にとって意味のあるわかりやすい形で示すという行為は、いわゆる「説明」であると野田は主張している。

6) 告白

(24) 「実はね、彼、プロポーズしてきたの」
 (『流氷への旅 (上)』p.161)

(25) 「いいえ」
 と、夏美は首を振った。「今のプロだって、そう不満はないわ。いえ———なかったの。でも、今は、自分の力を試したいの。外へ出て、新しい試みができる……」

(『殺人はそよ風のように』 p.106)

吉田茂晃^{V)}は「話し手にしか判らないことがら」を聞き手に提出する表現効果を「告白」と呼ぶ。小説の実例にあたってみたら、「実は」とよく併用されることが分かった。

7) 教示

(26) お月様ではねえ、ウサギさんがおモチをついているんだ。
 (吉田茂晃 (1988 : 48))

(27) 値段をご覧になって驚かれていますこととは思いますが、このバッジには実に不思議な力があるのです。この商品をお買い求めになることにより、貴方様はきっと、大きな利益を得られることになると思います。
 (『デジタルな神様』 p.14)

(28) A₁ : 「…このシステムについて、ちょっと気になることがあるんですよ」

B₁ : 「気になること、ですか？」

A₂ : 「このシステム、住人が病気になると、療養を強制するようになっているんです。薬を出してくれたり、寝ているように指示してくれるくらいならまだいいのですが、……」 (同 p.59)

吉田茂晃^{V)}によると、「聞き手が知らないことが確実であると思われる情報を話し手が提出する表現」が「教示」とあるという。実際に、「知識として教える」というニュアンスが感じられる。したがって、特に(27)と(28)を見ると、分かるが、相手に教えると同時に、話題を展開する効果もあるように思われる。

8) 強調

吉田茂晃^{V)} (1988 : 48) は、「聞き手が(一度は聞いていながら)まだ納得していない情報を話し手が再

び提出する表現」を「強調」と呼ぶ。

(29) 信じてくれ、俺は確かにUFOを見たのだ。

(吉田茂晃 (1988 : 48))

(30) 確かに、遠くからサイレンの音が近づいて来るのだ。
 (『殺人はそよ風のように』 p.205)

9) 整調

吉田茂晃^{V)}は「単に語調を整えている」ためだけの表現効果を「整調」と呼ぶ。「のだ」をいくつか連続して用いたら、「強調」自体の効果が薄れるようになり、「整調」のように感じられる。このため「強調」の延長と見なしてよさそうである。野田春美^{VI)}の言う「軽く多用される」、「やわらかな表現にする」ための女性の話し言葉における「のだ」はこの「整調」の「のだ」と見なしている。

(31) さとみ「(微笑って) いいのいいの」

(野田春美 (1997 : 99))

(32) 「本当は、もう仕事なんてどうでもいいのよ。もともとこんなに長く働き続けるつもりはなかったの」
 (『デジタルな神様』 p.137)

さらに、「んです」「ます」「です」の後ろについた、女性の丁寧な話し言葉における特有な「の」はほとんど終助詞と見なしていいほど、「整調」の表現効果を上げている。

(33) 永原浜子 : 「いえ——ただ——何となくそう思ったんですの。……」

(『殺人はそよ風のように』 p.173)

10) 決意

(34) 俺は行くぞ。行くと言ったら行くんだ。

(吉田茂晃 (1988 : 49))

(35) それでも、私はこれを成し遂げるのだ。(同)

(36) 「行ってみたい」

口のなかでつぶやく。

するとすぐ、それが「行くのだ」という決心に変わっていく。
 (『流氷への旅 (上)』 p.221)

話し手が実現しようと、既に決意したことをあらためて自分自身に言い聞かせたり((36)), 聞き手に示したりする((34)(35)). また、強い口調が感じられるので、てこでも動かない決心の表明を示している。「強調」の表現効果につながるためであろう。

11) 命令

(37) 落ちついて！冷静になるのよ！

(『殺人はそよ風のように』 p.49)

(38) 「早く帰ってくるんですよ」

出かける日、母はそういつてから、さらに念を押すようにいった。

「いいですか、札幌に勤めることなどは考えるんじゃないませんか」(『流水への旅(上)』p.224)

(39) おすわり、すわれ、すわるんだ!

(尾上圭介^{VI}(1979))

ここで一応形式から、肯定平叙文におけるムードの「のだ」が果たす命令の効用だと見なし、命令文とは考えない。

ムードの「のだ」で命令を表す言い方は目上の人に対しては、使ってはいけない。「のだ」で表す命令の特性は尾上圭介^{VI}が(39)をもって、うまく説明している。これは、外国のテレビ映画で“Sit down”というセリフが三回くりかえされた時に、日本の吹き替えが「おすわり」「すわれ」「すわるんだ!」という順で変化したという。つまり、「のだ」で命令する場合、聞き手は既に話し手の要求の内容を知っているのである。知っていながらも、なかなか話し手の要求どおりに行動しない。すると、話し手が再度命令する場合に用いられる。非難の意味合いも含まれる。

12) 発見

これは初めて知ったことがらを納得したり、受け止めたりする表現効果である。意外性が含まれる。

(40) (それまでわからなかった機械の使い方がわかったとき)

そうか。このボタンを押せばいいんだ。

(庵功雄^{VII}(2002:285))

(41) 「へえ。あんなわけの分かんないものに夢中になる奴もいるんだな」と、克彦は、素直な感想を述べた。(『殺人はそよ風のように』p.40)

「発見」はどれも「確認」と似ているようだが、実は「確認」の場合は、必ず聞き手が存在する。聞き手の提供してくれた情報に基づいて、聞き手に確認するのである。一方、「発見」は話し手が初めて認識したことをそのまま口に出したり、自分自身で受け止めたり、納得したりする表現効果である。

13) 再認識

以前知っており、しばらく忘れていたことがらを再び認識したり、把握したりするような表現効果である。

(42) しかし——恋人でも待っているにしては、その表情はあまり浮き浮きしているとはいえなかった。

俺だって昔は恋なんてものをしたことがあったんだ、と浮浪者は思った。いつのことだったか、どんな女だったかも、忘れちゃったが……。

(『殺人はそよ風のように』p.10)

(43) そうだ。今日は『マイ・ベイビー』の発売日だったんだ。(『デジタルな神様』p.155)

用例を見ると、よく「忘れた」「そうそう、思い出した」「そうだ」など、失念や想起を表す表現と併用することが分かった。

14) 客体化

(44) 朱子は、もともと看護婦になりたかったのである。(『殺人はそよ風のように』p.21)

平叙文では、主体が一人称に限られる感情形容詞などが「のだ」をつけた場合、第二、三人称を主体にすることができる。

4. おわりに

本稿は現在時の肯定平叙文におけるムードの「のだ」を中心に、理由、推量、換言、確認、説明、告白、教示、強調、整調、決意、命令、発見、再認識、客体化など、計14種類の代表的な表現効果を分類し、整理してきたが、各種の表現効果が完全に截然と異なっているとは限らない。重なったり、つながったりする部分も少なくない。また、すべての表現効果を包括するのは厳密にはできないが、ムードの「のだ」を理解するのに、最も代表的な表現効果を挙げるのも、役立つことができるのではないかと考えている。本論文の研究成果は、日本語の学習において、ムードの「のだ」についての理解を深めたり、日本語教育の場で、実際に少しでも役に立ったりしたら幸いだと思い、本稿を終わらせていただく。文中、間違いや不備がきつとあると思い、諸賢のご叱正を乞う次第である。

Received date 2011年7月26日

参考文献

- I) 野田春美(1997):日本語研究叢書9「の(だ)」の機能. くろしお出版.
- II) 久野暲(1979):日本文法研究. 大修館書店, p.144
- III) 田野村忠温(1992):現代日本語の文法I——「のだ」意味と用法——. 初版第2刷, 和泉選書, pp.22-49

- IV) 山口佳也 (1975) : 『のだ』の文について. 早稲田大学, 56, 227-229.
- V) 吉田茂晃 (1988) : ノダ形式の構造と表現効果. 国文論叢, 15, 41-52.
- VI) 野田春美 (1993) : 「のだ」と終助詞「の」の境界をめぐって. 日本語学, 12, 49.
- VII) 尾上圭介 (1979) : そこにすわる!. 言語, 8, 5.
- VIII) 庵功雄, 他 (2002) : 白川博之 (編), 中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック. 第2刷, スリーエーネットワーク, 288.

用例の出典

- ① 渡辺淳一 (1983) : 流水への旅 (上, 下). 角川文庫.
- ② 赤川次郎 (1985) : 殺人はそよ風のように. 光文社文庫.
- ③ 渡辺浩式 (1999) : デジタルな神様. 幻冬舎文庫.
- ④ 柳美里 (2002) : 魂. 小学館